

最上盛衰記

下

沈氏正居
卷之八

最上成慶表記下之卷目録

最上成慶表記下之卷目録

上杉景勝使者と山形く差越さる事

義光公の雁君生害の事

家康公金津へ出進發の事

近玉の諸將為加勢ト山形く死集る事

畑谷落城江口五毒毒討死る事

伊達之宰相正宗公ト山形く加勢の事

長谷堂合戦の事

津勢山形く押あがる事

山形合戦の事



一會津勢退散の事

一平治元年の降参の事

一庄内退治の事

一上杉景勝并佐竹右京大夫出陣の事

一修理大夫義康の生害の事

一在河津林の老母の事

一里見越後守山形を主退の事

一天皇原に於て赤馬揃の事

一義虎公巾逝去の事

最上盛衰記下之卷

上杉景勝使者を山形に差越さる事



一豊臣大將秀吉公巾薨去の後石田治部少輔三成叛逆の事

景勝國本へ馳下り密かに隣國の諸水をおかす事

山形を味方にせんを使者を以て今度豊臣秀頼公

を尋ねしむる事

於て大圍を築き先手を却て入る事

具上隣國の事

中をわたりて入魂を遂げ居る事

越えしむる事

義光公此由の事

前守志村九郎を所 鮭延越前守等を召集の評定
有りし先義光公定より其の度景勝の所存を察し入
に秀頼公の幼少故 家康公を七し其も萬百我を
いまるせん為め 秀頼公を其を寄せ近臣の諸將を催し
と覺し 叔の毒も亦如く我数年家康公に
即厚恩を請はる事 山崎も之志今更京橋に一
味走りし中し思ひも多し其の所存をお察め
とるはは使老を討殺して不日に會津へ移向し
とありし事と 佐々木 鮭延越前守進出布錠の趣
誠以て其能き事 中より其 志を退て愚事とめくらしけ

はに家康公も 数代西軍方の家とて 關東の大將殊に
家康公之融對し其との謀を其 一ふれ其悟はとも
是者之も其 近志の流おもし其の旗号も其 且上
去り何れも 軍勢の強弱を定て 會津に押か
しめて大軍なすし かつ其 謀も其 味方は山崎に
不知事の内 敵より其 勝利得るをいかに其
思召され 先其 家康公の返りに及は
るは 後其 家康公の 進出され 其のあり
家康公 後其 当地 其 治定たる 其時國中へ
引入れ 中其 戦者 其 地 其 戦者 又時 其 其

格書くことどもあるしとある時ハ安くと後利得玉ん
り此等のうちなるしと理を言ふと中なる義光公と云ふ
而思案すといふも中なる義光公と云ふは景徳公
一味も多き由而返る義光と云ふ夫より急き家庶之氏
趣き注進し多し或道家の故其堅固に治存る夫
は加勢方の流を此方扱又景徳公より追て休者といふ
は彦彦市一味有き由惴悦改められたき出陣中用道
此為るそ金銀多き送り義光と云ふ時に義光公是
をい給く由前仕候の面々に宣ふを厚く迎へ一味も
はあらされは贈り物押返さんと作事なる水牛庄

也前守中多し向後の美格別先部は方の意を
新く此のしと存此是非は彦彦市に在りしと中上
水義光公と同一支使の進物金銀苗玉水即ち
番改物取中及彦彦市馬廻を配分して被下る依て近
習ふ様のもの甚く識た景徳公一味と云ふは
もくかたはり或は皆くはふやきなる能者に一人中なるは
是金く由彦彦市水牛庄なる由彦彦市に秀頼公より
直に彦彦市にありしも聊の函引なきを能くも色は
出し玉ふ屋なるにされは彦彦市に可也長物語是あり具故
は第一彦彦市に恨を大岡秀吉公と云ふ能く彦彦市に義光

其の秘苑の御姫君有るを関白秀次公志まりに御取登
故もたしかごとくと上方へ参らせ給ひし所に結句を對面
もましはさま 利く秀次公言珠山とて中生害あり依て
大割より石田と福増に仰せ秀次公のおもひ人三平文
六左河原に訪て害ある然義光公の姫君と具内にて
折原義光公を京のり故は由をゆゑもかきみ思召
手前具浦山の既後と申者に依るる秀次公のおもひ人
三左河原に訪て害せらるるゆゑより 我々娘も具内あり
汝難人に跡もなき娘の御後の神守とせよと涙あふ
言ひし其の事細思ひつゝおまゝの日迄志まらまき者の中なるは

明自たるの御使に参らせたりと申す方跡の御宣教頼命を
中々其是に不審あり大なるの御使に依りあるる事
これに既後の中様とのにははもなきにありし昨日姫君
此中御後の神を見て余れより依りて三代御恩の念
形の姫君御生害免りたまふ事分りて立帰り何事
申し人々然れ難兵の事たわけ申さし事一時公を元心
而首を打ちしるも腹を切て死出三途の御供中御事を
かきりたる事人むと申しあかす事多し貴族の存念
玉極まり志まらば御恩の神守をまはしく思召知に
左様のお慮りあり難言ある事なりとて御取れども

中へ河川をさへりて我光云ゆりて急ぎ山頂後を望み
あに汝の中条玉極せり松子ありて見えて帰る何者か
も若しかしきとて筑後君よりなれり中にておさかき
者をほめてまをれりや中条朝の神委しく元終て死歸
り中上ノ中大名又之位を官の公家方此中息安達
三平六人外之文の市公達以生実害の改平目録にて姫君
ハ平十番目に當り給りて三平河原に二十四回に墮
ちまり庭垣結垣一其中に東に身長九尺四方に下
塚をりき関白秀次公の古首を西向に其目録中宛後
此女房達を三十六人整國の者を具足きそ太刀長刀

扱持きしとさきましくかきり彼上臈達のけつさうりつ
に勝れそ花やまに誠に移り形も世の中やまのふたふた
引かてさもあけあるや海かみのなまけとさぬ川原
者等の手に海りま勿神さくも中かきをわははんで車
一輛に四五人引牽き若君姫君三人は巾乳母の手を
引きまし其毎現の膝に坐落中を引せり三平河原
へ引付車より引ありて庭垣の内にあく諸人よましく
く面をふせもをわや中条朝近くありしうまふも上臈
達急ぐ短句思ひく此辞世をおそをし急まり

一番に菊庭の大納言後五娘は年二十四歳是第一の

清見のちりり歌に

浮世の花のけしきを思ひに伏見嵐に散れてまどろく
か移りのくぬびとあはれをいそぎを合せて南無大出の彌陀佛
助七娘もともしく中首の前へ落ちてはる所海へ奉りめのと
死生の山路道まのふはなれにまをんと我をも害し娘れと
かとりありしは泣きれとや目録のあはれを叶ふまをてあふ
けなくものぬの泪を流し身を引立なきも輿に打を電て送
り返りしや中首の有様をみくくと尸上をれまをりしと
まをたんとて七日めに終る空しくありにけるよ大納言殿北
の方にはまをりしをききし絶え娘のうたをてくぬびと
こころをうたふ

身二着にありは中首十七歳は三位の中お后も中娘あは
かこちをとりしは紫の柳色の着緒を首へおて白き袴の娘
も志をて練衣の單緒を打中首自ら序次の中首も三度
れもむいてかくり歌もむふ

朝かほの目影まの甲の花はなくお海よりもるま身を悔まし
中首向ひて十とくしをふと中首の前へを落すなれ
身三まのた梅津も瀧後中娘三十三歳まありはるまをれも
をまもやとしくおはしなれぬとや中首も浅くはるの
はまもまをりしをむきしよのまのしるまをりかあしと夫人の

五葉も目の前に見えを浅申ありし事ともあり

頼朝公は院の赦のたをいひ首をさし入御所ある身を
あきらむし折つらふに二十歳を一期とて仏とせしむるに玉ふ
死に當りて仙千代丸と申せし若君の母上あり生年二十二
歳おあり此前と申す中々も不渡玉日此世下世守娘あり
結言に鍾惟子重て白綾の袴をきて若君の先代討年をこれ
に其死骸をいひし水精の珠敷を手に出玉ふ此程の歎きの
余り又若君の命命の神一とていふもぬいりあり村角
に折れ水とて糸茶の玉珠ありあまる風情を中く目
もあつらぬ折柄あり大雲院真安上人来りて十念を
授け玉ふ念志のたをあらうとて辭せし

はむやうたをいはれをゆくさき此の何とぞ踏にあひたさめ
お頼朝公の御事にもあつたはれし水とて

お五葉お百丸と申せし若君の母上あり生年十九歳是
ハ尾張の住人山口松雲の娘あり是も若君の死骸を
いひし我も追ひ年々人と真安上人の十念をうけ玉ひて
あひらき世をくらこの世を覚てはわくわくをいふの淨土
お頼朝公の御事にもあつたはれし

第六卷 おはちの前の生年十八歳姫君あり是北野
松林院娘あり白綾の結言の單絹重ぬ白き袴引たる

もりの夜に打子てたにたさう紙に抄經持て右におむいの
玉の珠をくり返す一以經の巻もまきまき 法華經の普門品を讀
誦して入道處も後まに後生も善生と乞請くまゑらうし
て辭世におくまうし

一海の大慈大悲のかけねまの月の いうてこもらん

第七番 おんちの首とて十六歳是に尾張玉武後長
門守娘あり実の日頃花にたこむれ月をむてまをひて
くまらくに昨暮して後世のいとあまふおむむよ
らてつらつら身のはぢぢよのそを俄あまき真女上人
此教化をうけしをあらうしとかくはあり

さまたちし人をあまふはく首のまを照せしとの月
第八番 おんちの首とて十六歳是に尾張玉住人神乐的太
郎娘まきいこもやだけとまきまき里家をもととて切
拂ひ孫貴に同く白の袴の緒をしめ紫林の花はくし
摺しる小袖おかけたるふよふの花の歌の雨にうられさ
有揚をえり月もいとあまきまきまき刀をうらうと十
とをまき何かりつかくまらうし

いづくもあまや語はよふをたひまきまき世のあま
陀佛

第九番 おんちの首とて十六歳是に尾張玉堀田次郎右
衛門娘あり浦まきと七月のまき白まきの籠に身をそ咲

とこれとあはれくもさきもつたれとてうそも叶はぬ物も
唯一の御とおもひまゝに覺てかたがえ

冥途は君を待たんとすも愛もつたおかけに
身十番おろしの前二十三歳是に近衛殿の女内侍川
主膳娘ありみめもちて嫁れ尚更乞ふ入まじり意
悲めくもつれいして毎日法華經を讀誦しこの種は
いよくこゑもさきをわや前部の種も妙法蓮花のこゑ
とよめ利

妙もこれ法の蓮の花のよんむれ新と頼もまらぬ
これ我々前部のよとの葉にち前部前部を落しける

第十一番目に當りて姫君の御前部にありまじり
をとおもひ前部の中五年た十五歳いままゝぬくめる花
のこゑくだくもあまに奥羽あ國の美人あり此故に笑白
秀次公をきりに近衛殿阿まれ七月はめらうと名
を奪てこれほあくの旅の法くれそまゝは丹んさんは
しまさるうちにはるおこりな故人とみまらいた
ましうまらせいらもしんちうんもまゝくんをくらた
きそ中まをまひもそ原にゆゆしあかり共院殿り
まかり新まられ近衛殿の取成しに大御ももこしかく
思召しさらハ命を助めんこの十六鐘倉にきりし尼に

たせとの以証有りたれ人々怪む伏見有り子馬にて
危きなれとも危角因果の花の縁北のかれなくや寂
もや害をし以跡にたれしごとくあそ水をまよたり
静世のこころも尚おとあしくかんたぬ

あまのまをたきけも好活陀佛のたとえを我身
なりせむと高のそをしもむかひ見る人少人眼にもむ
たりまをしのれおろかなたれも中まよをたてやさし
くおろもたそひおかりせよき梅の香を桜の花に
にはをせそ柳の枝に咲みされともうことし玉鬘をさる
き切おとせぬ眉の曲りにおかり葉のまのまをかりより

あまの涙の流るるははらむことし繪はうらむもいお
てまにも及びあまの白珠結貴の単結重ぬ白皇袴
川をぬあたとされおろてあろあもたまきよたやみく
けれをぬぬるしことききも中しやはうらなしこの糸
あまの此中りたれ妻いなるまといはぬあまを花をさる魚
まをぬ人達つてあつそし引立たけある髪ももろけ
以御首を打落ししやうたにまをぬも扱もかきまも而有様思
ふた甲斐もなき十七八はとち余を一野うたに座垣のほと
まよふ血の川に花流水をる危獄をぬのかまやもさそあ是あ
るらん者殿群集の人々も以まをぬるりぬまはれをぬんし

かきし神を志家女ものたしきて其首を可死にらめ言
生塚と名付たり 此は有根をありのまに中上左衛門鬼を
もいしも之き義光公も心みこれありて其落深隈より
其首を今に流くやをれたりとせば 以て秀頼公におも
むきのふくも物に家康公の取子とてを義光公より大河
原先の名馬を信長公に進上する時中前守家康公可致は執
成あはしませり 以て義光公は其情の腹切けてををむかじ
義光公常々思ひも何卒家康公の中原慰思報しをも今
意輕の刻文祿三年閏白秀次公貞州中出陣の御家康
公と而出るに折首義光公の四男左馬助後を伴ひて
家康公日頃の御忠賞を存知則中男左馬助の
以前忠義中を成りしは披露せしめ家康公斜に
らば其後喜まはしむ方此に入とて又國持の子息を
今度披露せしめ 別は名字の上の字を賜り家親
と名ふとて後に駿河守に成され名が如斯に存思を披
け更金津に一味の義おむひもまた定を略しの中計
略ありしと申され人々をたかしく皆を色を奪ひしと
みたり

家康公金津へ申進致し事

一 去程に家康公に景徳叛逆の告を以て召置長五年六月十一日大坂を以て取籠めし事此伏見に一日申進致し事此鳥居彦右衛門尉内友隆彦右衛門尉松平主殿時松平五右衛門守に申仕立作付此七月二日江戸の申城に入此の事公にも申評議あり義光も委細の申状を以て此同十九日秀右公奥州へ出發向あり遣付此の事家康公も申馬是事同日翌日少山に申陳あり此扱あり水戸城に佐竹右京大進義之助方へ崎田治重を以て申使者とて今夜金津申進致の先陳被致

此の由仰致し事此義光公も我全く家康公に對し是事此の事大坂に内室を以て申此少孫金津先怒の貴命に任せかこき旨申返す中此は家康公に申す所なり則水戸表を以て押入此の事父子金津へ申進致し事景徳退治の申評定一此所にも石田三成の叛逆關西の諸大名一味に既に伏見大津の城取籠めの由七月廿日少山に申進致し諸方の早馬櫛の事も引如し依之金津表大坂宰相政宗山形少將義光公仰付此結城守相秀康と少山に對し是事家康公秀右公同十八日少山

を命ぜり江戶城に入らせ玉ふなり

近玉の諸將為加勢山形馳集了

一 書程に家康去りの市書七月廿三日山形へ向來し義
 光と相見を遊し此命津表頼入の勅旨に依りて
 此處より此旨近玉の諸將は加勢よりして山形へ來集ある
 爲き由而不知有くばしり事も不日に馳集り軍評定
 有りと宋澤口より押入し然る家康公は父子共追付
 追進せらるるに近玉の諸將著列し侍らるるに南形
 信德守五千金部秋田藩太郎二千六百部戸沢九郎
 五郎三百部赤尾孫四郎二百部孫仁督保兵庫

百八十部識口刑部百十部内越孫四郎六十部
 岩野守金部四十部とを存し右の人を評美
 して堅く一隊同士の起征文徳の出羽守處へ出たり
 義光公は先光沢口より攻入しと修理左衛門義康
 七千部隊を引諸將敢居を方六千金部南部信德守
 と先陣とて臨し打出甚くは山形近所に海取なる所は
 上方にて石田治部少輔叛逆して望岳の諸大名大言味志
 伏見大津の城を攻めたる官家康公は父子を引引け
 の由諸將の陣も告來るこれに依りて川津も大にちりき
 諸將押さへ起共我々領内守如何成るの出來せ

人々を敵ものもその取を敵早義光よりも一左右の届たも
各々して各々夜に陣を引拂ひ取れりて引退く程も
不日能く守佐未越前里見越後以下を義光
之中に遠く既に加勢軍中今度上方鋒起の事には敵
き各敵内へ引退く軍に加勢の時遠く去るを為起証
文通の事には其申事もなく刻一に左右も早く引退
きし、各々早く引退く程引退く中を以て所に
義光を押留めしむる程も其理も其の由めんと
せば定て同士軍とある時敵に陣をうかひらるの
又強き沙汰に及びて結局敵方へ一味の北軍も出ん時

却て家康公に對して不忠となりし流石一同悔起のよ
昔に來るる事と云ふを面々敵内も何ぞなくおぼし退き
各もことほりなり元來家康公一命を以て家康公に推し
まんとある上太右の人々親業も昔に其は以上其
方達尼働き肝要なり、ら成大軍に出あふるよ、や不覚
の取まらざるに理を尽して宣ひしつれも其疑心を同じ
り去程に加勢北法好しをまゝなるに其山の害所には然
り折茂園守丹波典頼等なり、ら加勢の恙なく引退
を以て如何程に怒り歎しと思ひ本戸押留めて通させ
各是を見ても速本戸を深き通させしと依者を以て中

これと本物相馬中より以て度麻止との以加勢として所詰の起
末と敵の旗をも見えまはして正行の旗定て上杉殿方
へ一隊と覺るより以上義光の下知と察り中へ入るれ迄
いふ程もいと甲斐よく敵を中へ入る扱も危さうき関守衆
併れこの名際の所に対刻籍一隊片時よりた武士たの
甲斐よくしして押破り通ふんとて若者も進み出ると
其中より押留めいふ今理ふ辰た各方破れぬべから上
杉方一味同公あとも取沙汰あふ思ふ関東より叩かめ
何方時よりあしおれに上番所の神と見えたる知の命甲乙
きしく先陣の海とに救多味炮立掛火繩をせよとたり後

北山より赤まゝ白旗を立てて風にあたり木かけの所に救多
の兵卒群がり居たり若し木戸打破んとせし時は打出き
やうに又くより免る理ふ辰にさけりて故なき乱をもとむる
乃理まゝんとて待たり名を程に使も山取より悔り義光
公の返返り速くあまたと惣相馬あはるもよきは各別相馬退
引の所關所を遠通し居き由ち水と本物相馬木戸を
閉き通しよりし居れも立寄る番所の神と見え水城に關
中の謀りあつた水ありとて立寄る處より鉄炮を多くしは
常の旗より火繩をとり付又後方の山に掛立する旗は
赤き帷子白き帷子なきむらけて木の枝に結ぶ付たり其

外女重造つて駭きまき本陰に主を承さるふか大勢の
神に刀をかけたる去建と与惣右忠当座の謀ふか
言語に絶する時人これを感じたり

畑谷長城江口五ヶ所討死す

一 會津の城主上杉中納言景勝逆を陽れり家康公大
軍を引率し萬長五年正月極州大坂を遊撃ありて
州小山に所陣召れり名廻留治に少補を成景勝の先
直江山城守と内通し家康公を差挟み討するよし
知行廿石米沢城主
西山中島の諸軍勢をお催しなる由に進みよつて先石田三成
と謀伐せんと小山の所陣を掃ひは登りあり會津の城を
いさ子息秀康卿と押さへて守都官に所陣あり依て伊
達政宗も白石の陣を掃ひるを著く會津を為に成に
なり直江山城守景勝とありて河前み子以下河白

河表にて一戦に打果し天下の藩原一帯に世々と思ひ
たに関東勢を上り馳登る由石田賤亡疑ひある所は左
有勝と此方の大妻あり先を運て宍上義光より一味有る者
返り宍上と思ひ油断ありたる所に思ひの外にお達し近志の
諸勢相かちむひ山形へ悉く加勢と為る由海老金津の
城場狭にして大敵を引待待もあつたし依こは同く敵
上と押あせ上り山長石堂等の城を責落し山形義光
を亡し宍上の市城東根の城を責落し金津の女童を籠
ち所所重そ取進むは當城まで一戦して米沢へ引
取上東根の城引取り東に吾妻山を堺とし西に羽

黒山北に秋田を後よめて籠るものまぶし所所何程の大
勢といふも容易く責あかとし殊に内々示合る關西の味
諸將も大坂をて勢揃二をたかり伏見大津の城攻取悉く
猛威をぬるふの由江進に強き山形加勢力此諸將も皆く引
去りたるよしあつたれ本望は是にまて居りたる以上は急き山
形へ押あ義光を亡しこの留比うつふんをばらんとす
諸將も皆是と同く軍兵を老保したる先陣も亦江山城
守大將として春日右衛門上泉之水大關常陸守後陣は
色部修理大將として大軍を引率し羽州宍上と押
知れぬ所 宍上といふ小城有り免ぐりの山形

くして大勢を引受けをみよかたに勝利を得んす叶ひかきし然
江に五ヶ馬と云者城をとりし所大勢青集るより義光公
少平しむお積の一乱に及ぶまじり兼て此覚悟取れ少
とまらるのん保ら五ヶ馬一を以て大軍を引受け城たも
ちかこし人急き款来らぬうちには江を少死く引取しと作
業をせられし先五ヶ馬は由承り此諒むも承りいしく早速
引取中しきまされと乍去之命をわろをたにたるよと
いとも以前常に在城をるか積の時の為ありま也危き時に
退きし中り侍の道とありま実た名にま代もあふ所詮以城
を以て討死侍り忠を死後に継ぎんとく中しく引しきり色

いおありたりは与義光公少平しあつはれ是量の老式然る
加勢を安をきんと谷相相控守飯田橋守守留並忠左
衛門日野伊賀守等に馬廻り数百人在座く急き烟火火巻
され各然る所は五ヶ馬守色款修理を先とて兼長
五年庚子九月十二日畑谷の城へ押寄開の勢をなすなり
なる江に五ヶ馬六ヶ馬に伏兵してそ身百餘計り引連
城外へ押出さ結引結を種を惜まも散々に討り
先陣を瀆彈正をみ兼て又い多時た其中に旗炮百餘
打撃り城兵百の者十餘をかり將幕倒しに打落され
跡兵さくか江引色にあらぬを右の尾端より前田兼光部

平居歩雲澹おつ取突かる城兵押之丸大子をか
し引退くかろ所に塙うちより大筒亦立か片貝を
吹とどく伏兵起り立揃んて散々射かけり上杉
鎧儀よりの軍法まで最中最正二年別年と云可有て大
やうの時不意に逃てもとをりまるとあり敵は當りて惑を伏
兵に却ておめりし伏兵を一支もせし城申さし引
入係上杉勢退き打立を承りかろうちにて三十餘をり
うとれに片江に百餘をありしと大子の門前へ池出春日日
吉馬のり勢大波合東北へ押さるし東へ追まくり大花
を射しと殺しとる敵も味方し討る者数多志然と所に前後

城中より 忍ひ出敵の必勝をぬきと取置るも卒尔ある者
阿し塙の間に立居るをある是を見てまきや城中へ宗
乃を思ひあつとまきんて手原死人をを流す宗越押入
んとまきに五と番に兼て討死と思ひ定しうとれか少もとるむ
なまをかく十文字の旗を引提敵のま中に一面もふは突
入をれ同痛子惣を備次男小吉同甥の松田久作を始と
しと家の子郎等我もくと切てきて志のまを削りし法をを
り東西南北入ちかひををせんと殺ひたるさしもに
進むあるの勢も以勢ひたれくし一處もむりし引り
争いねる手原死人の伏しとるさあは 河原の石の如し能る

に大野直江は青き人を居るしから愛に究竟の所ありそ
張炮の者をきりて後のさまは此のゆりて城中をえおろし敬く
打あけたる城兵もこれ防く力ふもあく今しかうよと見し
る城申のをもて、塙を破り狭うをくりし水先にと逃落たる
あまのいよく力を得てをしくと返過り飛り懸きを以て塙
を引倒し我もくと案をれ、五ヶ居は討もふされし人ともさよ
まはわび城たもちわごとし今一軍いさきまを殺つて立後きら
んと大野の門を押し開き血はたありし太刀生向にさしかさし
火者多た名をうつりつままきくは款の中へ死物ともむと切て不
合程に面を向へる様もかしきれそ款火勢あつてもと入替責
け

未だ終に味方十餘とてきた討あれ今いそ是迄を戦兵の手にあらし
そと地返り腕十文をにかき切て伏せりたるを惜まぬあつたり者も
の兵部北乃五ヶ居并出男山吉甥久作を三人の首を兩城
に火を付けて獲圍ををあけたりたり是もさき山形より加勢に
差をれし兵駒をあけて急きとれもはな畑谷落城とる由生業
るにばよに力らちと引返さんとしるるる相相様守飯田橋摩
守もぬいさや兵部人を助えと馬をはやめて行くをた城中の男女
を助めせよ逃るもの者畑谷落城不討もき取物もさるる山形
さしとて所を奉るに款大勢退かざるを橋摩守を是をんを相様に
向いては身落命を引と逃出あく我の跡にて防備中魚いそ

故大勢に渡合追りまりの戦ひ等三三丁程まゝりまされ故

大勢をこれ以後を切田前後より責を死せしむるも別ある様摩守も

大勢をこれ以後の平の上を討死せしむるも相模守是を責せしむるも様

摩守を討てて何の面目もせしむるも世に面をあらせしむるも討死せ

んと馬のまゝ追ひつゝしと追ひつゝ八方へ却て追死せしむるも主

を討たせしと追ひつゝしと追ひつゝ八方へ却て追死せしむるも主

に何れも追ひつゝしと追ひつゝ八方へ却て追死せしむるも主

勢もあがり共自害も及まん様摩守も首をさしむるも

法をて男女を先きと山形へ引返しと追ひつゝ八方へ却て追死せしむるも

畑谷を責落し江口五郎同小吉久作を介首殺し言ふも十

余を責落し江口五郎同小吉久作を介首殺し言ふも十

名き上山長谷堂押寄兩城をも責落し言ふも十

畑谷城を江口五郎同小吉久作を介首殺し言ふも十

慶長五年庚子九月十三日討死行年五十五歳

法名長松寺殿江月秋光大居士と号す

同嫡子江口惣左衛門二十歳落行住所不詳

同惣男江口少吉同日討死行年二十三歳

同甥 松田久作 同日討死行年四十四歳

長谷堂合戦之事

一 去程の直江山城守茂長五年九月十日 畑谷の城を思ふ
はるに攻落し 軍兵を二千人分ち長谷堂上の山を城を
攻めんと同九月十日 長谷堂を押寄大將直江山城守侍
大將上原重水大將常陸守足輕大將松木幸之助後
陸奥春日右衛門あり 其時長谷堂に志村伊豆守を城
しく中組百騎中用足輕二百人 龍巻谷 籠居 直江山
城守押寄長谷堂より 拾遺 行程 隔て 菅沢山の陣を敢
え 春日右衛門の尾陣に陣を立 羽子 五十 勇 未 経 ず 幸 寄 あり
由なり 城守の若者原行と出せしむる所に伊豆守加

勢の敵と中金を一人 柵より外へ出させしむる 悪く 静り かつて 居
こり 係 ず 伊 豆 守 家 来 大 風 右 衛 門 横 尾 助 解 由 と 云 者
大將をそそり 兼て 伊豆守に 打たれしむる 若者 二百人 撰出し 相違を
定め 二千人 ありて 幸 寄 右 衛 門 陣 中 へ 忍 び 入 り 其 名 も ま た 切 伏
ける 百 寄 手 思 出 せ し む る 事 な 然 陣 中 上 堂 下 へ と 返 し け 敵
味方とも 分ち せず 同 士 討 ち せ し む る 事 あり 幸 寄 右 衛 門 馬 上 幸 寄 へ き
隙 なく 漸く 大 刀 取 取 り 山 城 守 陣 中 へ 入 り 引 入 る 然 者
夜 討 の 兵 七 萬 づ 陣 中 へ 打 破 り 首 級 百 拾 五 打 取 り 味 方 何 川 へ
入 る 事 あり 右 の 首 級 持 者 あり 幸 寄 伊 豆 守 幸 院 限 り 大 々
物 亦 の 大 將 幸 寄 の 若 者 夜 襲 首 級 得 せ し む る 事 あり 叔 義 光 あり

鮭延越前守と曰は長谷堂に家前加勢を遣はせ受も未之心
もと打く旨を方なき馳行伊豆方を合を請ふ評定遊
面しおまむてしかり付く如く城中一人も柵より出たる
と後花の越前守と手致引具し長谷堂馳行伊豆守に對
面し以意の趣事なく中述す能く喜ぶ事あり獲討に敗走し
口惜く累日四七日先後に志懸城^堀を青島守城守に預せし
里方の櫓より銃炮打急中在時の日打たる者多かりたる
高き青島守と有る事なき事あり大圍を以て城中へ打かけ
る長木戸に當り壁二間余打破れ多き音百雷の落たる如き事
またし是に利を得て喜ぶ事あり城門を破るともなき事あり城守より

志村伊豆守草薙志摩守出せしめ切け出さるせんと
戦ひ多し兵卒厚死人殺され左右の櫓より赤檝を渡
炮いあまの兵追返され引退くし松本守を助う大勢兵
日、戦た入形あり志村伊豆守草薙志摩守比介形ありあまた春
日を追立てし切せおは所より松本守の時横倉に穴あかる
伊豆守不許しと引返る松本守に入る人なき事あり草薙
志摩守大勢左右に立ちあがり松本守に打あがる本守に助
是を見てそれ逃去せし渡り合退り返りし戦ひしを
し助源守を厚くあがり深入りて終に討れたる兵卒於
合六十余人同様に討死し直江山城守是を見て大

城を以て善具に入勢を攻め而して此を城兵がもたぬま
に防ぎ戦ふ事にも詮方なくおもひ先年手原を助も
て中傳く事引取れぬ城中の若者系勝に事なりし追
討に打ちとんと勇まけし能く伊豆守何とて勇ま若氣を
働きぬしと以城堅固に保り數日を送り於て義光
等より猶又復讐も有まなり生時内外より糧合打出
たる能く勝利を得てし能く今卒亦打出付入し
せし水も悪かりぬ元來付入の上杉家の海物ありと
少なき雖又義光公越前守に依りて令れ城中の
勢兵一人も柵より外に出さぬと委細知れしと返

多く卒亦に出さぬ事用ありと能くし若者原少く水
に何れも悪かりぬと上山長谷堂へもあまる款を
そ儀に差す事とせしありあればれ出向い款を
追捕し分捕する名を令り口に中言わは所なきを
此方より是輕に數多は出し作物を焚取をを載
前守是を見て伊豆守を招てし能く河水見ぬ事
の若者原田をもちあり事い若者在軍あをに望めは我
もあひ出一軍は走まじり引入ふ時危なりぬ根にはか
ひるひと既し打出人と志す事伊豆守に於て款を度
經令款まぬと返来るも返し令を成るは是早し

引入るる處し其後のまゝた免も角我に任せぬといふれ
越前守と跡の家光爲に任せ申す只今今公家の働き
流儀の程を見むひとを薩本組百騎もあひ大寺の
門を押開き二男と三人と打て出蒞田止る者をも逃三
山際へ仕くさる志江の中へ切て入れ家も方にも
所のまじいと入乱れ追ひまじりり一時をかり戦ひ免
角味方此れ後よきものや敵の物取を討取る程に
孫の家もおくれ立後隊へ進入る味方の兵勝に
て高しかけ入るるを敵家守押しに留めたり日も
夕陽の及ぶるを兵を引揚げたる然るも是を

及そ付刀を棄てんとすあけく追かけられ申す内へ
豆守と申す金一守ありあも梅をい早よりあつた
あまの遠く追かけ棄入るる志江を伊豆守兼
と斯く有るまに豆粒三百人引具し大寺よりまじ程
馳出道をけきみりあまに仕て待戦より又
か隔てて降炮一底に打放し先に進むる兵を將
基倒しに三拾騎あり打伏すの後隊を見と進ま
秘して見くまらうちに伊豆守不知て早く引入るる
あまあつたあく押はし引退るる

長谷堂城主志將伊豆守兜重知行を万石

此時の加勢天彦草薙志摩守氏家尾張守指指原甲斐守
兼根薩摩守坂紀伊守津山秋生田周防守小國大勝膳
等あり

延長五年九月十七日の合戦に金津方侍大將上白泉
主水討死生年十九歳上山侍金原嘉高討取はる
の木尾補之丞所に墓をたらしあり

豆粒大杉末李之助討死柏倉侍長谷原源右
衛門討取

金津城山形、押寄事

一 金津城守、畑谷の城を善守、徳守、長谷堂、押寄
事、然思ふの外利ありとて、對陣し、山形表田思ふの外小
勢成りとす、いさ山形、押寄、義光を討取、軍兵
を分ちて、同九月廿日の既、山形、押寄、其の由、義光公、思
ふ、以て畑谷、城又、長谷堂、并、上山、入、人数、を、一、札
思ふ、の外、小、勢、あり、よつて、城、中、より、一人、も、逃、り、去、り、と、下、知
し、つひ、と、畑、谷、出、馬、の、下、候、に、山、倉、守、甲、斐、守、先、直、三、男
大藏、大、美、里、見、越、後、守、延、沢、宮、内、倉、河、江、肥、前、守、長、崎
式部、兼、根、源、在、島、并、及、伊、豫、安、原、大、和、白、岩、備、前

大久保主馬助を先として伊達政宗公の加勢一千余人
巖本流陣にうゑを九月廿九日早朝付陣を立て先陣
既に須川より着来敵の三河尻と美指の間にさへ入り
南津川を隔てておる折苜時雨降りつゞき川水以の外
増りぬ敵味方共た渡り難し相多死良延延能登守り子
息延次官内守の馬の速者打たれ只一騎進て川へ突入
る是を見て五百余人我者くはと一隊とつと急込し馬
袋をちりて渡りぬれさしと大川をれと一騎の爲にまけまき
此で難き向の岸より着にる之をに加勢の大物琵琶の敵
の旗を立山形勢より二三町下に打へる先陣川へ突入
たりを千余人一隊に川へ突入先向の岸より着て大音
声切てかゝるに金津勢此勢に怖れて一戦も及ばず
して引返しぬ義光公見えむと味方川を渡りて人
馬とも労れぬ事長途ひて戦を味方敗軍をへきを
早く引返すと下知由是に依て諸勢一隊に揚鯨波を
あけて引返す義光公斜ちりて悦び玉ひて其日早く
舟中へ引入りぬふ

上の山合戦の事

一上の山、六里見越後守を城せし、近頃足利元の四里奉
行作付し、此を身山、少無くお詰り城、子息民部兄弟
を以て、兵士卒、己方お討し、一をとり、依て以て度加勢力して
草刈志摩守を差越され、其勢五百全隊、よき死たり
志り、長五、己方、十月十六日に、金澤勢押寄先陣に
横田式部推助、堀七郎、大軍あり、物見山を打越へ、
近道の村を焼掃し、物見山の林原に陣取り、後陣
の大將、中村造酒、之、引をせ、山をあち、陣をうち、
かり、を林を、いり、城中の兵、是を、つと、し、一度に

打て、出て、壘内を、し、のやり、を、受、彼、所、の、能、所、く、追、詰
首を、取、て、お、く、を、ま、と、一、男、三、人、多、所、に、見、民、部、い、は、る、以
城を、畑、谷、も、遠、く、地、の、理、よ、ろ、一、飛、い、か、た、也、と、く、落、城
芝、を、角、目、と、言、也、と、言、う、あ、に、い、教、は、り、と、も、打、て、今
年、亦、よ、亦、と、出、付、入、ま、せ、た、れ、と、知、り、あ、ん、と、い、は、れ、皆
く、丸、と、中、所、は、民、部、入、舎、を、遣、り、出、中、々、款、い、は、る、今
程、よ、の、長、途、に、は、ら、れ、と、い、は、る、之、前、後、の、陣、程、離、れ、り
と、い、は、る、是、一、良、好、の、備、い、は、る、い、は、る、所、く、取、か、り、志、は、勝、利
を、得、ん、と、い、は、る、一、有、し、と、言、れ、志、は、る、一、取、か、り、未、だ、打、出、て
為、さ、る、と、言、れ、民、部、志、摩、守、に、向、ち、て、身、を、あ、り、間、道

と経て物見山へ行向て七戦ひやりて中羊あらん時に鯨波
は考をあげ玉ふ志うふに款を後ろを取切られと即時に
川退くくし其時高に古み付て岩危く退落し討取し
然る後傳の先傳に力らと合せんと馳せ来らん其時近と
と引うけまのあふりし見おろし權を打よ打よと中兵
を馳せしと五百余隊のうちより強兵二百余人走り
出し則問道を問りて物見山へ入るる志なき多高子の先傳
様田式部推聖孫七郎に向ひ此城の思ひの外地の理
軍く一旦に志を落さるるやかかてし断論向陣を取り
言え加勢を乞ひ静に言えまきと申す孫七郎穿て何

糸去り有るるに志を不畑右に下色部修理頼景を奉
して五ヶ岳の志を討取上杉殿の威をまつりてり以城を
他の勢をまき入るるに志を不畑右に下色部修理頼景を奉
評言まき入るるに志を不畑右に下色部修理頼景を奉
打取山も山崩るるをり蘇波の志を討取上杉殿の威をまつり
の志を不畑右に下色部修理頼景を奉
たるまき入るるに志を不畑右に下色部修理頼景を奉
はあふ志を不畑右に下色部修理頼景を奉
守時分いよたを志を不畑右に下色部修理頼景を奉
まき入るるに志を不畑右に下色部修理頼景を奉

るはありありもたよりをめぐわぬの勢大に勢なきは悲な
く後藤と一所あるんともたはれはしとともあれ一處に岩北立
て家先を引返して後も引また物見少くよちのあふんと
あふを山のよきり大石枯木投うけしお多程に四方
へ散れしとともあふの敷多のおひひよふさる所へ海は
程よ南山北の谷川にて往來五六丁程馬も通ひ難き所之
く水谷川へ押寄せれりやうよふ海はまかり死もひりあに
おほくもあつて城兵おふまに討たれり池を陰謀の
本村造酒之悪仕の所をまよは軍をたてて入り勢を散ん
と馬をけやめあけまきり行先は所をよまはて返して戦ひ

とて先をよ進んでかけ出り切なき城兵も四方より所に
味方のうちより坂法之馬と名をたて本村にかけあがりむま
組造酒之悪大割の士たあ忽ち跡をたて押伏せし原
と馬も包きうたる若武者た水もあつて陰謀を引抜き下り
隙をあくは通しと水にさしも隙をあつて造酒之悪もよをりしを
け程かしてあもたあしん昔打落し今度のあまの大好中
村造酒之悪を坂法を討たれりよと高下あつて水もあつて
あつて水の字名やと味方一同襲ひたりやと歌方良大物
うこれ力もたつとて家先をよ進めし志摩守法平に
下知して逃かけ退けられし切なき水もあつて若武者

以兵方に逃歸り格田式部もやうくして山道を越え道
水にたりされ九月十日新野の戦ひに大將造酒之丞
を討つた格田式部も早岩石見岩井備中宛竟
此兵二百五十騎難兵二百八拾人余打取られ金津勢
惣敗軍にして是れ引退きなりさて城兵を討取首を
義光公の宝槍よひんれに取らば越後守を
それ程方子息をば越後の傷き内是なりと告ぐれり
越後守取らば左面目をばとて一々扱又牛頭石田治ア
少補有り直江山城守許く一連の兵北討来し
多延折之し山畑楊摩守居合せ是をみて上 方の

格田式部も同しを越利運に討つたをれも 何れをらん
算らざる格田式部も大息をつき義光は
近江の陣にあり大將造酒之丞を討死させしもの
とて一により扱上方勢敗軍と云ふも山畑楊摩守後
ちに山畑に取られし時に物ありしをばとてなり

上山古記録の中より上山城を里見越後守子息民部
と云慶長五年庚子九月十日金津勢首事あり寄手
大將中村造酒之丞同格田式部と云則九月十七日城首
津勢敗軍討死二百拾人大將中村造酒之丞中川然理堂
の上の處と云所に取られし格田式部討死に中村はまゝなる太刀隠れ

云ホ牧野村正八郎右衛門と云者也越後守上言則義光公ハ就上
右の太刀相州正泉三氏七寸の名取より加加誓正記の為伊達政宗と
云進下右金津勢者来り以道下川口小穴越来言里見氏部川口
程下行分水の所に備と云る先沃方より来ると焼拂火舟の太物
と云る松村の山を激馳を爲同苗甚五郎と云人等討取是二番首也
二番首川口村次右馬打取焼拂村川口村赤坂夜言言松
村より金津勢敗軍の首太物横田式部河原部守松の山より
川口の方ハ山道を渉く三千人程を退軍中絶

金津勢の退散之事

一 かくて長谷堂上の山北を我山形方勝利よ成り此れ
直江山城守戸上山の方に退陣共より同日九月廿七日義
光公出馬なり敵陣五十丁程隔て陣取ぬ此れ亦た関原
北合戦家康公中利運とて石田治部補を以て関原の諸大名
悉く敗軍の由日馬別産た義光公大業た思召しこの旨諸
軍へ觸るへ款を定て今略日此うち引取へきの留進討にを
願しと諒ねの陣へ觸るへ何れも物の具堅き村居より然る
去夜金津勢方の陣取は戸上山の方を以て松の所見く中
上言に今宵の宵夜を定て明朝引取へしと宣ふ所に款既ホ

引退の由先きの兵より告事なきにさふ。打て出よと義光公馬に
降り出ぬ。諸勢一同掃たまんて退けしを。敵方杉原常
陸守海に左馬之助立留て。兵勢五百余騎取て退し防ま
戦ひ多し。終に退けりされ引退しを。尚も掃たまんて退
けしを。山守山城守さき。別勇の大將をた。山を原に取
返し。諸手を以て戦ひ多し。故味方も退散され。二十丁をあり
引退す。山城守も。此陣を張り。敵味方た士卒を佳す。と
人馬を休め居る。を。元辰辰山城守十月朔日の曉に陣を
拂ひ引退く。神にもとあり。山の腰に伏兵を備ひ。並。峯ふ
陣を張りて。行く。味方。是を。引退く由先承

り。中。来る。義光公。山守山城守を。出。し。折。敵。霧
深く。敵。備。ひ。も。又。く。さ。城。守。先。を。進。ま。な。し。敵。近。し。引
け。目。の。下。に。し。て。引。退。き。し。敵。多。し。射。程。に。百。余。人。打。伏
ら。れ。先。陣。一。度。ば。つ。と。引。退。く。義。光。公。是。を。見。ぬ。ひ。て。籠。元
より。入。り。引。退。散。せ。し。事。知。ら。ぬ。山。守。即。引。退。き。馬。出。下。の。者。は。敵。お。と
ら。し。と。先。陣。た。か。り。さ。や。り。必。死。と。成。て。戦。ひ。た。ま。し。志。村。義。光。の
之。船。中。に。在。敵。多。く。討。た。た。り。し。に。此。紫。方。の。者。も。毒。呼
研。と。云。者。兵。法。修。行。し。て。馬。を。日。り。近。年。山。旅。く。来。り。し。を。召。抱
ひ。し。れ。幸。ひ。此。度。而。供。い。し。と。言。は。者。義。光。公。の。遣。の。袖。を。ひ。く。余
り。又。籠。元。近。き。宮。中。引。退。り。死。し。し。と。中。々。義。光。公。毒。呼。高

をひらんで汝等程もあき穢病者哉かきとらに成り多軍に
大將川邊きまると士卒を家先とて追を行き却て追討に
陣もまやせ程に取詰り見らるる味方討ちた敵を
追ひ詰りて大音程にひかり玉ひきき斬れ面目を
くくてもも穢病の程は片や目にかげ中えんと進まざる程
たつまやれ陣炮も左の肩先よりおぬりれま逆に落ちて死
しも有りなりといふはまきとるはくはを笑ひたり其外
有死人を数とあはれ義光公兄孫にてか頼りま程くの
にありて打る者多し透りませし責山とれま口方より
知しといひ程中ひに及まはれ程兵にまる追死とありて切廻り

婦を修理太夫も峰を隔てて悔しきまはりし由を言ふ馬に
ていひかきしも程とま程まに成りて二千余人おめまは
けんそ義光公の程に程に及んまはる所長谷堂の加勢の
うち山と大睡せ程程程程程程程程程程程程程程程程
と岸つてに押寄る程程程程程程程程程程程程程程程程
下知らぬと士卒の程程程程程程程程程程程程程程程程
と程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程
かり何ぬまなとらとあはれ追かると程程程程程程程程
程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程程
かりて道橋よりせまは程程程程程程程程程程程程程程程

敵多し、味方は向ふて安んずる事あり、今彼方の難所を討め
し討取らば、又も助る事あり、是れを討て、此れを討て、此れを
城守三百餘計り、も少しも敵を向の岸まで、三日早に
引寄せ、又く取て返し、敵を戦い、まくり、三ヶ所を勢ひ
味方押返され、敵多し討れ、も少しも山城守も、虎口を遁れ、
敵軍の兵を引集めて、乞降す、降陣し、多敷に戦ひ、
金津勢凡千五百、八拾五人、今も味方も六百、或拾三人、
討れ、も少し、義光公、今も今度、景徳一味の諸將、関ヶ原
まで、悉く敵軍の由告来り、今も、此れを討て、少くも、
却て、此方の勢を、敵多し、討取らば、心静く、降す、無し、根子、少し、

周章とる言を、多く、降陣し、も少し、誠は、景徳武勇の流
成り、今も、冬十月二十日、降陣し、も少し、

直江山城守景徳の詩

元旦

楊柳其賓花主人 屠蘇舉盞祝元辰
迎新送 舊挽桃符萬日 千門一樣春

松煙

孤松吹雪倚岩樵 一夜枝頭白髮添
睡起朝 未開箔見灑橋詩 思在蒼髯

下治右衛門降参し事

一 去に上杉方に下治右衛門と云者有て庄内尾浦の
城に在城しと云は成直江山城守家上と出陣有て畑岩
の城青森由少恐ひは所家上并越後の後却可成
与山城守方より越一門及ひ至勢五百余人と松里越の疑
有と載て家上并合道に命を承先白岩の城を青森
し九月廿五日長篠へ着て軍の換子少届々多に去江山城守
上山長谷堂の軍に敗軍のより少及ひ今義光の後
切と有て又も信彦内へ引取ると成りかゝる田正将時殿
陸し多り十月穀白の新岩地の城を築取引籠り多る由

山城の話を有る義光公の教を差向け討取らる由
評定の如く又甲斐守ありて終は治世の武勇の史有
侍あり終に甲斐守と申す何卒謀を以て味方に
あり終に甲斐守の妻ありて終に甲斐守の妻あり
三守を甲斐守の妻ありて終に甲斐守の妻あり
名なき岩地の城に近郷の諸生を健守と終に治世
馬の籠城せしを取らるる書ありて終に甲斐守
今をいふ一通の書を以て終に甲斐守の妻あり
諸將濃州関ヶ原の合戦に忠を敗軍し終に甲斐守
山城守一昨の軍勢を果して合津へ引返し終に甲斐守

貴族何れを人教を守り討死しぬ終に甲斐守
利運と遂に乙之きいひて終に甲斐守の妻あり
上へ降年し忠義を屋を終に甲斐守の妻あり
之きいひて終に甲斐守の妻あり終に甲斐守の妻あり
伊豆の甲斐守と終に甲斐守の妻あり終に甲斐守の妻あり
軍の上は甲斐守此城におありて忠志ありて終に甲斐守
景勝公甲斐守を得終に甲斐守の妻あり終に甲斐守の妻あり
守諸將を引き終に甲斐守の妻あり終に甲斐守の妻あり
く終に甲斐守の妻あり終に甲斐守の妻あり終に甲斐守の妻あり

詮伊豆守中條よまゝの世寂上取へ峰集ありて丸家
をくしめいふ思堂より玉をくす眼前ありと憚り
中々皆皆丸と評義を完りおまぬまゝ城を
峰集より出た各伊豆守大を悦び下流亦忠并一族乃
下動七郎戸井と大馬原八右衛門下流佐井上平
助其外不詳 石具し山形く着しと比古披露
義光大を悦び大治亦忠其外一門悉く古出流
成庄内の先かけいしと丸家を居しめて田川郡不詳
知新志き由志に存出されたり川水も難有仕合
里と悦むあり

庄内退治の事

一 義光志村伊豆守を下して宣ふ先年武后家を亡
して庄内三郡を平に介知中庄重長と抑取られ其後
上杉の領地となり尾浦亀崎のあ城は城代を居
以て庄内方は何れを以て尾浦城代下流亦忠を味方とな
は上今亀崎一城のこありは庄内を奉取しと評義
有る即ち三男清水大藏大夫及弟中舎弟楯甲斐守
及弟若とて其外松根備前守志村伊豆守里見越
後守加茂源右衛門越前守其外五平屋山形を
打立下流亦忠先年として酒田押取るる事

城より上杉殿より川村兵庫志村修理のあ人をいふなり

知行一石

知行千石

なるより由をいふよりも多き會津へ注進し加勢を請はる

しきり中よりあかき心もそく家上勢川向と押寄鯨波の勢

可けん城上より下るといふも扱大物取物も取あは

川端へお出陣取て扱く家上勢川岸にお守り渡えと

いふもいふ言にゆて大川より渡船をもと免言あし折し

十丁程川上より舟十に五艘漕きあぐ今春の先知不

治者馬と云う教は名守を水に皆を脱しお守りておあきと

いふと書あはる城兵も兼て部しとるあ川村兵庫

志村修理前後にお守り堤の上より伏せりる数百挺の鉄炮

の音は折る程家上勢敵多折れ進まざるいふなり

治者馬の門戸井末は心前も敵有も思もぬまをいふ

お水もの武具もみよもいふと流せと大音もさ率をば

けまらさるいふもいふお守り戸井とるいふなりと下り

手勢五百余人ありきとていふなり大物大花さる

是もいふ我守り有あは先知の勢を目の前して討

せしるやういふたは水にお守りお守りよりいふ悲く

家を渡せると馬を川へ下り水にお守りお守り者お入

く渡り中くいふあはい渡り難き所を一隊の下知

りして難き向の心算かけあはるいふなり川村兵庫志

村修理は有様を分ると多勢に任勢叶ふまの一を相もいん
引退く亦を治水高いよく傍に立て城際まで進かけ百余
人討取大物く軍糧より水斜あふも悦び玉へいささの勢心
に責入り官を水に諸勢一度におめきと見て働きんるに
洗炮の音年さけむの勢多天地も驚き大なりおれは
志村川村ある元未強敵者故に士卒をばけまうて城中
かや島り交をせんとし防を幾ひも水にたやまき責落しき
もあかりし而か後跡在患敵後守る先をさ水しと法軍
に撤出て堀下を智計守敵んとするを洗炮より肩を
討ぬれれは逆さまに落ちて矢にり敵後守是を見て源

右馬を討せし後下をさるのあらは何の面目ありて人々に
を向ふべきを逆さまにあかくおとし透回す責入ると
先先に進り大子の橋を渡りあやむ水に士卒あもけ
入堀逆茂木を引取り大勢かつたに責入り小泉 澄波
戸井半左衛門井上平三助等より叫り責まら水に志村川
村のあ人今より叶を思ひて言多に以上城を閉き渡
りま官は言大物く中務をさしとて水に伊豆守討て大物
清水大花大末後かんとた城中跡も討取す思君の所伊
豆守中より城中の若御に討取んと其味方もも腹死
人多かりし先命を助けられて城を治取れりし此れ

こも角もはか、ひそ城を法取勝園を揚子より来り
川村志村のあ人を義光公の而指島をうへしと安細山形
一注をいしれ、義光公の表院斜あらん思は川村志
田のあ人の石具一た及たに任せよ金律入返をいしと
原をれを表す志村伊豆守を跡をいす外縁はいたたき
由信をいすれ、即ち志村川村あ人金津入返をいす地
るに志村のあ人金丸取たあを伊豆守に跡をいす官向後宣
家頼をいす跡をいす是に定をいす下をいすのりにはやま後義光
公庄内酒田而下り有る伊豆守を酒田の城代に伊豆守長
谷岩をいす一万石の所は加増有る三万石に成下をいす下治右衛門の

對馬守にあられ界郡を三万石下をいす(二説)則尾浦
在城をいす由伊豆守一門の者ハ石の所押をいす千石以下
され其力にあされなる上杉家を治右衛門四万石の知行あり志か
は夜の或印に依りて三万五千石と成り上二城をいすのり弓前
此而月とうらやまをいすのりありなり 扱又義光公、庄内下大荒字
と云古城をいす取をいすりてを治右衛門と改稱し而隱居城にお定
られ新関因幡守を治右衛門七千石跡をいす馬上百騎足輕
或百人をいす古城代とてを治右衛門のり後子細有るを治右衛門にお
或り石馬廻りの内より百をいす跡をいす加増をいす志村城代、小園
橋守和田越中守等をいす志村のり

上杉家康公、國を原とて石田治部少輔一族討亡せし故諸士の

一家康公、國を原とて石田治部少輔一族討亡せし故諸士の

大小名、石田に属せざる者、あかりなき地、石田に上杉家康公、石田に組在

し、河津、身守り、石田、志江山城守一已、石田、亦、合せし、多、塔

京、勝、上、於、河、川、て、た、た、知、不、申、方、言、上、有、次、家、康、公、少、目、且、し

家、老、の、者、り、企、る、ま、ま、を、主、人、と、し、て、不、知、の、よ、く、不、届、に、思、召、し、合

津、百、万、石、河、津、取、手、米、沢、へ、引、退、く、き、由、を、信、出、を、次、一、家、康、の

侍、兵、連、判、と、し、米、沢、へ、大、勢、の、者、引、越、定、て、飢、死、仕、度、く、給、合

津、の、城、を、枕、と、し、て、お、果、中、へ、き、由、を、究、し、如、家、康、公、少、目、不、届、に、思

召、既、に、合、戦、よ、及、び、石、田、を、諸、大、名、中、取、扱、く、高、烟、三、万、石、石、田、派

(米沢十五万石白川十五万石合して三万石也)引越す可振す一家

中の若しくは板板、今津を引拂、歩沢城へ引取しあり

其後数年、石田上杉家の所改悪く、多分の加役取立、水取ハ

百姓困窮、及、び、石、田、三、万、石、の、百、姓、を、打、取、理、由、出、し、中、若、江、戸、集

ふ、上、り、出、討、し、水、上、杉、方、不、届、に、お、取、り、石、田、三、万、石、取、上、け

り、且、料、を、取、り、難、く、通、加、役、中、免、お、取、り、理、由、出、し、江、戸、り、叩、下、し

、石、田、後、所、へ、申、取、り、未、だ、り、石、田、を、城、取、に、取、り、合、是、元、禄、元、年

辰、上、月、三、日、あり

亦云上杉家世継之儀、吉良上野介殿子息を養子と成り、如將軍

家の中不審を蒙り、白川領十五万石、取上けにお成る

常陸水戸の城主佐々木義宣金津の先陣を任
付し所領引所替に家康公の命の中三振を成水戸八拾貳
万石に取上りお州秋田にて十八万石を不替留付り
水戸

附

金津の城主蒲生氏郷文録四年二月郷死の後
子島蒲生秀行家長三年に官位移りてを
跡上杉宗勝越後守 金津城を移り米沢に直
江山城を移り家長六年に上杉宗勝金津守
米沢城に移りては

奥州金津百廿九千石

從三位中納言宗勝上杉輝虎道謙信の家督
實長尾越前守政景の子則謙信の甥ありてその
喜平次と云ふ謙信の養子三郎宗虎(北条氏康の
家督を承ひ石取をひきまき白山をこれに討越後
を治め太閤にまかじりて七十五万石をたぬり金
津に轉封せらる官中納言にあり五大老に加る

家臣

- 北万石 羽州米沢 直江山城守兼録 三万石 藤田社登守從長
- 三万石 甘粕備後守清長 三万石 本庄出羽守
- 白石

二万五千石	隅田大炊	一万石	嶋津日下齊勝久
二万石	大関常陸介	二万石	色部修理長實
三万石	安田上總介	三万石	田 左内
八万石	田田将監	五万石	栗生半左衛門
二万石	北川図書	七千石	布施治市左衛門
同	安田勘介	二万五千石	外地甚五右衛門
千五百石	青木新三	一万石	岩井備中
五千石	井筒玄之助	二千石	三平松本京
一万石	川村兵庫	千石	志村修理
七千石	明野左近	六千七百石	渡邊左衛門

修理大夫義康及而生害之平

一 義光公嫡男修理大夫義康武勇智略といひ義光公の御
 家督相遠有るは思ふ所又後人の者有る義康の近習
 比者何れも中合せ先客之義康に上る事何時迄も
 御座任之務り所不自由の痛敷事あり 大坂五光祥
 の事此より御家督御譲りされし所隔居極き之事
 左様も是所不審千石も在り如何様御次男駿河
 守殿数年江戸に在り家康公に最老の由承りし
 駿河守殿の家督を継ぎと思召の古座在り式と色と思
 護言中より義康に在り有る様と思召たるよし折に

宗市公の風情を以て多能く曾て人又傍に在て我
先之に修理方未及所す如し様中を日頃の内気色
唯すあつた足きせ玉ふ中なるか所村長に持統と
光の寺へ所出酒宴有るふ中酔狂のうく近習の
着き成とたを乱れ持興の余り照指鞘造りしそ
股を少し突玉むるを誅者なりと能き事と思ふ則義
光公へ傳りし事而家督所譲り玉ふを延引し自ら述懐
有る事や既に所自害うら故所を近習の者共所留中由
承りし所命す智思見と如何様なる中今可有る事
乍れ義光公も実と思召左様の所存玉ふのあたも成

事成仕出く之と思召けるより色に出流中悪く見
へさせ玉ふ一門家老宗市和睦に務め様々に中し
之をも別して中ねさ有る事や終に中中より玉ふを後
義光公江戶に幕府の御家康公右の顔の上り此所上
意に依りけり能合修理大夫惣領といふも親の命を
背くに於ては名も角も義光討ては任立し保美有る
屋敷に於て家督の業に誰と譲るも公庭より由
仰られ此所義光謹中より誰と中とて市中流
此所男護河守に此後存りて難有る存る中上は
家康公内より此所守十三歳の時より而近習に召仕

一入不便に思召れ給ひて在脱ありて乞座の趣神妙人
家督駿河守に在遠有留教由は信多義先統有
中詰仕則由是なされ修理方まは使者を以て使者
之れより今度女子の中ふ知の脛上守に達し是所一
家不和にそい必を志家を破る身志は双方堪忍を以て
女子其より和合あり由中上言あり依て子細よ及まは
對面は波余早と登城と有之旨使者を以て修理
大夫乞座に別条隔りのありと來り中使の者と在信の
子速以乞座城者多に思の介は對面ある生存方旨
有之旨言神山へ引籠り居申さしと云信渡在是は

義康一言の返答も及まはは供僅十に五人召具し
音に物に衣れある侍して山形の以城を治給ひは多兼
て陸路は陸軍圍の兵を討たれぬ見方人神を漂ふさぬ
たありたり近所の人々は供を乞あけぬは有申は是れ能
又君の以勅えを蒙り玉ひ將りて中よ乞有人乞跡
を慕ふ者多陸軍圍の吉もは乞座圍なるにありて修理大夫
只泪にられて免角心くもたかりたり 志するに内々途中
以て害し可申由在内尾浦の住人戸井半左馬に依り水
北陸道下かり紀州へ出たりあるた助由は在內丸島と云所よ
て左右の岸むに兵を敷せ是等銃炮をもて恐む居た

海を義康神もぬ身の悲しき事も知り玉に何心
く馬に尻水通し玉ふ西を福多し打し胸板を打ぬり水
折りしただぬりに馬より落玉ふ急所の痛も多し其後先を
玉ひきり内緒の人々殺りきて死もの狂ひも切てかれは左右の
草むらより伏兵も打て出ても踏さん討たけりて牛
に赤沙林之節兵常守長馬より飛をおり戸井羊たぬ
を討んと一文字も飛ぬりて所を伏兵のうち矢倉源大助
と云者後より父子と組付て身を返して見けるうち左
右前後より兵卒も取付て常守長とて世を矢倉
を右手にはかんと投げ付左右の敵を臨拂ひ殺す戸井に
かえとてたぬ戸井つる上は長刀を以て打てる所に打もの
さしかさしかりたるは戸井り郎等後より赤沙林より是拂
切し打たぬ常守股切て落すれ今に是と云者といかに討手
此者も主君修理大夫殿より執事者の為に此のみ子崗を不和
ありた依て悲しく老翁を感しつる所出入りせ玉ふ所は公道
不義のふりまゐるをて義光公少時此は後悔あり汝ら
安福ありましそて刀を取盡し已り首を掻き落し矢にたり
されは半た鳥程なく清水大花大末自逆の砂大隈へ
内通の沙汰頭れ一門悉く誅討せられり是義康公
を害せし天討眼前ありと諸人舌をふるひたり

東海林老母の事

一 幸 東海林三官を傳宗長と交し、東海林集人進り男
にて十三歳の初陣の時山形に捕ふれ、来り、其を宍
戸端西員破庵にてあるも文武に達し、其情事をも東海
林一家に終に和睦し、山形に居させ、其十五歳の時、修
理大夫と見せ、お相取も元もを承て、其長五郎、合津勢
お入の時も、北江の中陣を切崩し、毎度敵陣方の目を驚かし
、其義光公の御覺他に、其あり、義康も水魚の思ひを、お
し、其あり、其義光公、宣ひ、其宗長、義康に組せし、其情
事、其あり、其お赤江の平におたし、其宗長、其老母、其を

穿て一族をたしむる。武士の子に僕く、勇に何れ可しと能く神や
佛に祈り、ある奇特に是を穿てといま神玉に侍の女房も
是を穿ていま若き中子の討死を穿て水も熱い水を伏せ、強んに
男の介治様におもひ、老母曰く、されこれえ、家の子共、数
多の内男子七人、女子二人、何れも病の床を死し、
男子は先年白鳥十郎屋の一乱を二人討死し、又一人修理
大夫後の正徳を丸屋に討死せしむるを穿て人の親の子を
死しかば、死をもも、或は戦場を逃ぎ、私の胆心を死
し、主君をも報せしむ、又病の床に死し、もあつて、徳い身を失ふ
る世にもまき有るかし、如以の人も穿時をも親々の身もいふ

と老翁は是の心、知る所、亦、おのこ、いか成天神地祇
の以守り、亦七人の内一人、大款をおまると、戦い返御して
無常を報し、親所入り、又、以、神中に死し、又義康
為、巨岩を討死して、主君を報せしむるの、清水火
を、死、四、成、改、以、兄、死、若、君、達、に、召、仕、を、子
共、の、初、末、皆、ら、箭、にて、終、り、を、取、り、し、と、常、く、祈、る、所、に、今、と、子
共、に、就、を、愧、か、ま、し、と、穿、の、沙、汰、を、穿、き、ら、る、身、偏、に、神、佛、の、冥
冥、を、穿、し、と、少、も、款、く、色、を、く、只、供、養、を、弘、年、の、誓、い、を、
義、光、公、の、由、守、君、及、れ、南、勇、士、の、母、妻、共、勤、ま、を、あ、ま、ま、し、
け、れ、と、近、威、指、を、水、し、と、あ、や

里見越後守山形を退く事

一切平儀義康及近習に召仕せし者内以敗取り多中
に里見民部の子息に権信と云者日以修理大夫及中
意を蒙りし者多美親民部に召置りし者 却腹中付らる
心民部是悲なり 畧り多系祖父越後守是を多いかに所
意おれり 孫權を信に却腹信付らる多 汝の外の所
所取あり 全く取引 汝官取りて 免角 汝地を退出
世と内談し 越後守始り子息民部一門郎等數多
引連水宿上を立退き 諸志を由り多 越後守は隱れ
多き者故に 加賀中納言及石籠ら水知り義光公は留を

守とし加賀を度へ而断有る 加賀を以浪人采り未り
越前少将及へ立身是又同断を 越前より居る
叶を去りて世の留流信のこし世かたきして之を神山へ入て
入道し 多知や之義光公は由り多り 多を以て終
宿上へ引戻し 一族を分けて方へ 汝を召らる
後義光公終焉に及し 時而遺書示 越後守子の若き及
為后玉の仇と成る者多 後小誅戮せしむしと云ふ事
則駿河守及中遺書に依り 中陰を以て後越後守子
中成敗成されし事 折段越後守が御箱の中に
為徳公の御朱印入置り 則清水大將さまをおかた

らふ山形を亡し勲功に備へ官領望を乞ふし尤其方中
領中亦及たる座内之郡不勝て下分以集京亦あり案亦
あやうき謀略もあらしむ事あり志かふる義先公に以てか
以美知路を歩む必然後の事あることならん可き事也
之れ死罪に初ふべき言候はれし交わらる事あるぬは遺言
とて諸人は是を以てしるる左の次第一は取返せし水清水
大花大ま返りし何る以てたふる事たふる滅亡せし水なり
越後守は先年里見動也麻に討れたるか難く有まし
今水と人との入し候なり

於天童原御馬揃之事

一 享長十二年丁未正月十五日 祿儀出々集る也月十五日
天童原に於て馬揃候へり方集る中亦及た
家中候者迄も日以馬をおたしあこり者出を居出
屋之併申庄寺前守殿境目の城より并五路を圍む五
拾路鬼ヶ崎百路定河江之拾路右左集るの軍居出る
美無用とてし主亦山形へ馳集り以候に付し
以能有れは程奉り中及た家中候者迄愛を
付水を用意し則ち日も成りしか實の刻より天童
原にお法々を以て申集りて御催しを以て候

近玉より集りて物幾千万と云ふ數を亦も義光
より出馬あり近習少姓を亦月々の内より若者
等三千餘擧出され一同唐城の羽織を着せ日連なる
當て中説のまゝ城持より集り初之と云ふをし翌に先今
日近引有りと傳出され俄より所歸城あり來る故
集りたる人々悉く不審をなし以て中馬揃數日以前
より中催しを事の如く俄より中歸城有るに或思召ふ
やと覺束束と何れも山形へ馳歸りて委細を伺ひし
今日中馬揃中近引の暇何も別業是を由中説は隨ひ
皆く私宅へ返りたり其日中帳ふ付し騎馬數二千七百式

拾金騎を以てたる相もり及て教を思ふにたる結る亦若者
亦打寄咄を以て度の中馬揃兼てより古觸故跡分り見
入る様ありと云ふをばれと申せしより近引の暇中説あり
なりと云ふは沙汰なきを亦人中にたりはるく尾形忠心
忠考の兄事たる前早天下も治りて龍言縁語のたゞ忠考
多かりん故におりから武器の扱ひも疎とあるを思召れ馬
揃に申寄され武器馬具の古きもね改めらるべき中説なふ
るは以て羨慕せり中催しを亦近玉の法士も亦のみに
寂上の駿馬數を亦人たり目付を亦越る一室も是也
るは亦中説と云見物由るれましく亦俄に中近引成さ

まゝのものありんと申す所歎嘆をいと少ししむる

義光公所遊去之事

一 慶長十八年癸丑夏の頃より義光公は美例の心地ましく
てはましく治療を玉ひせしむるに其の志ありしと云く其家
早き世の限りと思はるるを先づ此家数年家康公の
以厚恩を蒙り仰上たかふしむのまゝんと云く其家数
年目よりいふまゝにて同九月中辛にはるくと駿河の西へ
来府ありて右の趣言より玉ひせしむるに本田上野介を上
使として病氣の事あはれ、仰揚まゝ、宗物にて出まきとし
仰下され程有旨則上野介後同道にて志守城有る趣

に亦も所寢殿と召あられ程と仰揚情ある事云々の
御業を仰せりて下されまゝと又瑞雲の旨は江城も
立寄將軍も略乞申度き方上云々あり即ち此書を
以て今為老病をいとせし今生の略乞とて来府の
間とらつと乞はれ有るの由仰揚は義光公へ仰揚申
下され強く程有御戴有る退出し玉へ退府上使を以て
是程等色を相領有るからて江戸へ着府し其家
康公の御書を上たれ是亦云々関と云宗物申免候
下され則出仕ありて仰目見せしめられ大御所より
所指宗物申高以て来府申意不達し其上を相

領事とある所志いとし病氣養生と云きよし作事
水戸新宮聖日江府と云き十月申向子山脈下着
あふふとあるおむむと云きしとて折斗と云むる醫術
祈禱も叶わぬと終に蒙長十九年甲寅正月十八日
享年五十九歳にて逝去と云むむけ法名玉山白
道大居士と云むる志らるるに殉死の義実河江肥前守
同十之傳長岡但馬山家河内守光禪寺と云殉死
いとし其所肥前守身近く召侍し者友人進三出て仰
借中しき皆長と云むる官肥前守と云きまにいとむるといふ御
函引あり冥途苦累の旅に誰有て仰侍しえと云きまに

きぢは腋かき 切し髪 漱したるし 少き心と云しやと人
皆かんとぬものゝたふりり 二重なり

光禪寺は義光公の開基寺と云 天龍山之号し宗洞禪林
なり元七日前に有りと義光公の遺骸を以て葬りありしあり
最上家改易の後名居左京亮故移封せられ元禄九年
に光禪寺を三日所の地に移し義光公の墳墓を改葬し
て其跡に一寺創立せられ長源寺と云き是則名居公の
菩提寺とし玉あり

蒙長九年大坂御陣の時駿河守殿江戸表中留主
居江御付て出陣に渡れし事跡念に思ふと云むる旅之大

坂落城の繪圖面の巾原風家康公より所托あり其の
品光禪寺に納めて所宝物と成る

殉死者の墓あり

長岡前但馬守法名貴通義志居士
山家前河内守法名即海了心居士
寒河江前肥前守法名直庭是正居士
寒河江十左衛尉

一 關白豊臣秀次公 近江美濃百五拾万石 豊臣武鑑出

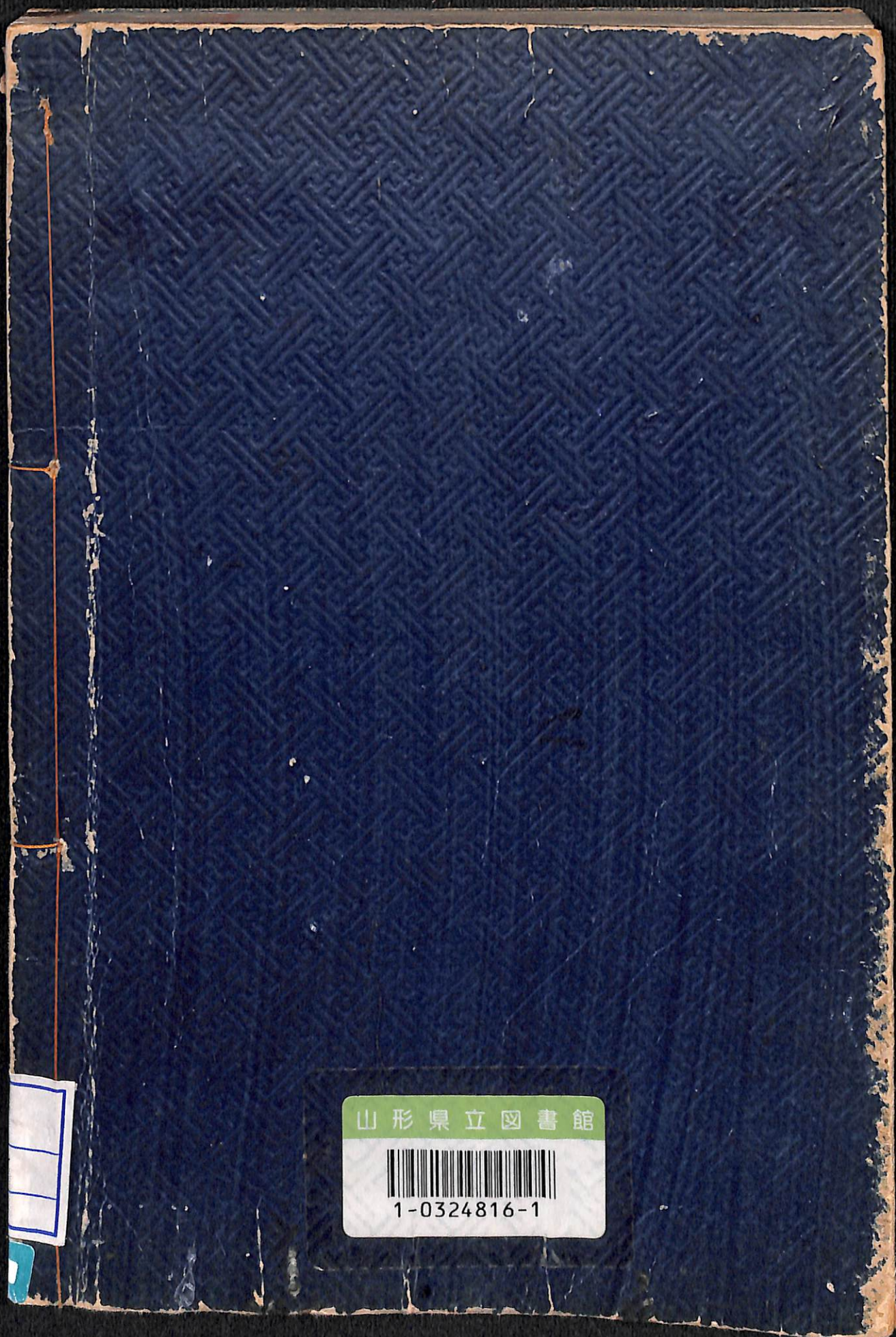
尾州愛智郡乙之村、任右馬允、文正初名之男也、幼而亡父、為孤母三位一路秀造將、以再嫁三好山城守俊保故、冒繼父之姓、早三好孫七郎、後為祖父秀吉公之猶子、賜諱字曰豊臣秀次、天正十二年志津之役、漸功、同十三年四月長湫、役將一軍、而為三州勢敗、同十三年紀州及四國九州、役有大功也、於此叙從三位、任中納言、同十八年小田原之役、有功也、同十九年、奥州九戸、漸進、當黨受命將征之、及セウラ兗兵乱、既平、不交戰、而飯陣、文祿元年、為關白領尾勢江之地八十万石、而在聚樂及大坂城時、為護者、父子之際、有間隙、然秀次耽淫酒、而行狀、每踰距、且隱謀之

事風聞^{ナカニ}以受^レ父公之責問因莖^ニ紙之^レ批^ニ詞上^ニ同盟赤心更其事
狀陳謝^{セシカ}為同四年伏見城赴途^ニ逢城之使价中村式^ア
少捕堀尾帶刀山内對馬^ニ交者大開殿下^ニ命傳^テ曰足下老^ニ
盟約^ス氏叛逆^ス今顯然^ニ故^ニ面謁^ス不許^ス高野山^ニ請^テ不^レ旨
也依^テ不^レ得^テ入^レ城^ニ直^ニ至於^レ諷^テ野也從者僅^ニ三十人^ニ電同七月十日
鈞命使福島九門太夫福原右馬介池田伊豫守等兵士
三千人^ヲ率^{シテ}高野山^ニ登^リ居所圍^テ命^テ音^ヲ述^テ曰君父^ニ逆^ス
者^ハ罪容^ル所^{ナシ}ト云^ハ殊^ニ寬^ク命^ヲ有^テ死^ヲ多^クト云^ハ爾^ハ秀次^ハ免^ル
カ^ラサル^ト知^テ自^ラ劍^ニテ^テ死^{セリ}行年^ニ二十有八^ニ從者共^ニ
滅^ス後^ニ一男一女及^テ妾婦^ニ三十余人^ニ悉^ク誅^{セラル}

右上中下三卷自明治三十九年十月廿日同至
十一月十一日寫畢於竹辭園中

河名雅齋





Small white label with blue borders, partially obscured, likely containing library or collection information.

山形県立図書館



1-0324816-1